



円の国際化と百円札の再発行

経済調査部長 絹川 直良

円の国際化のために、百円札の発行を再開してはどうかというアイデアがある。

東アジアの発展途上国では米ドル紙幣を利用することが多い。戦後米国のプレゼンスが政治、外交、軍事、経済と色々な面で飛躍的に上昇したことがその理由だろうが、技術的な理由として、1ドル、5ドルといった細かな単位の紙幣が米ドルの場合には入手可能であることがあげられる。

例えば、空港からホテルまでの交通費、空港の流しのタクシーでも、あるいは予約していたリムジンでも、現金で支払いを行う場合、米ドルで支払いが終了してしまうことが多い。多少現地通貨への換算で過不足が生じるものの多少米ドル金額が不足している程度では問題にならない。

あるいは、空港到着後に滞在ビザを取得したり(インドネシア)、空港税を支払ったり(ベトナム)等々米ドル紙幣の活躍する場面は多いが、1米ドル紙幣があることを前提にしている部分が相当あると思う。過不足があると1ドル札でさっと対応してくれるところが多い。その他、万一チップを支払う必要がある場合でも、現地通貨の持ち合わせがない場合、1ドルというのはチップを支払う単位としてもちょうど手頃な単位である。

調べてみると日本の百円札は、1974年に支払いが停止(注1)された。茶色で板垣退助の肖像画が書かれている。5百円札は岩倉具視の肖像画だがこれも1994年に支払いが停止された。

ここで百円札だけでも海外を中心にその発行を復活できないだろうか。日本国内では流通を禁止する必要はないが、基本的に海外向けの発行だけでよいと思う。

どの程度までの流通が可能だろうか。米国の場合は、1996年時点で米ドル札の発行残高の55-70%が海外で保有されているという。直近の発行残高約8000億ドルで考えると少なくともその半分の約4000億ドルが保有されていることになる。米ドルの場合短期金利も4%超と高いことから、米国は、無利子でこれだけの金額を調達できることになる。シニョレージとこれを呼ぶが無視できない収入である。ニセ札が横行するリスクもあるものの、円金利がいずれゼロ金利状態からノーマルな状況に戻っていく際には、収入源としても考えられよう。

この議論は90年代半ばにも一部の識者の間でなされたと聞いている。韓国ウォンなどと実施時期を合わせて、日本円のデノミ(100円→1円、韓国ウォンは1000ウォン→1ウォン)を行う際に検討するのも一案かもしれない。

(注 1) 引き続き有効だが新しく発行されていない、という意味

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2006 Institute for International Monetary Affairs (財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-Chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>